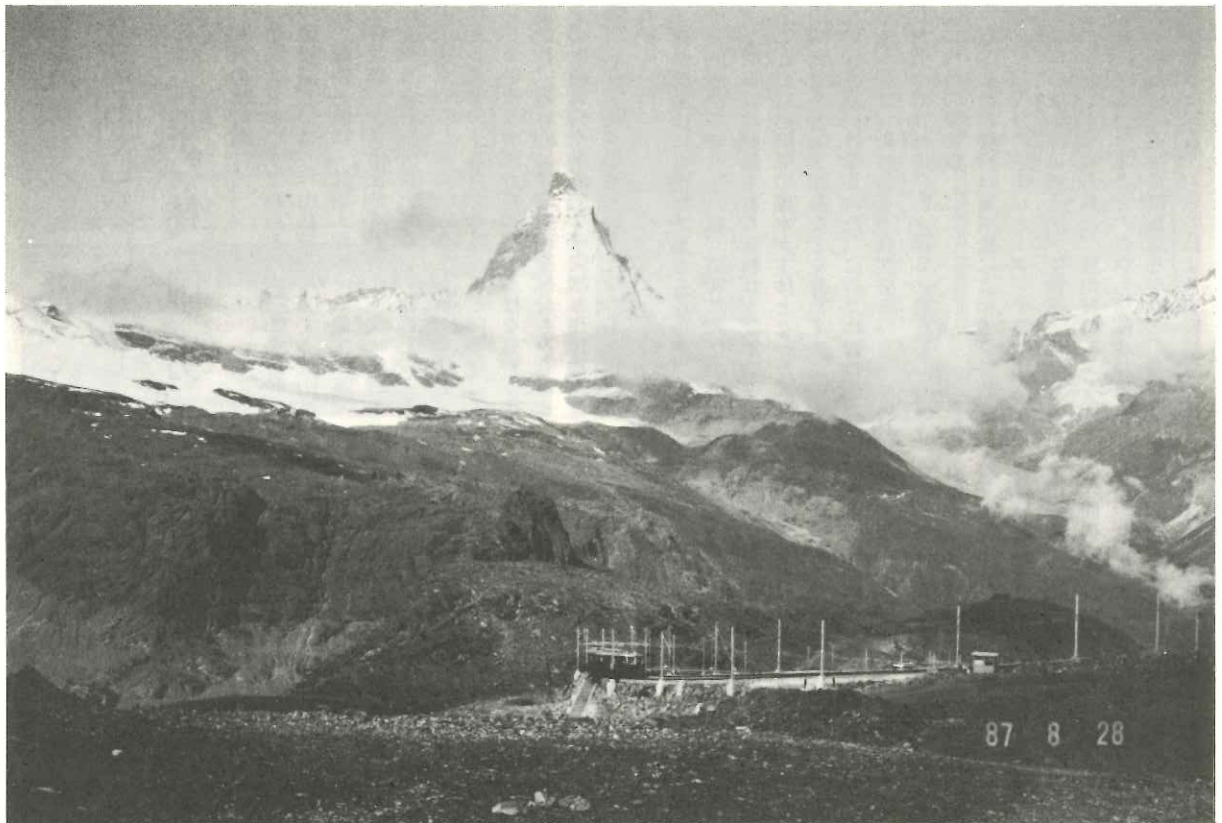


山と博物館

第33巻 第3号

1988年3月25日

大町山岳博物館



マッターホルン 撮影 草刈 清人

山岳研究情報センターを

スイスの山岳博物館はずーと気になっていた。近代アルピニズムのメッカ、スイスの山岳博物館はきつと凄い展示をしているのだから、と。昨年の夏、ベルンとツェルマットの山岳博物館を訪れることができた。学ぶべきところは、沢山あった。しかし、全体として大町山岳博物館はスイスに比べても、なかなかたいしたものであることを確認した。僕は、この博物館に展示計画を通して僅かにかかわっただけではあるが、大変嬉しかった。

スイスに比較しても決してひけをとらない大町山岳博物館のこれからの課題の一つは、世界的な存在である日本における山岳研究情報センターとなることである。各地に博物館が整備されるようになると山に関するものだからといって実物資料を大町に集中することは難しいし、望ましい方向でもないだろう。しかし、どこにどんな資料があるかといった情報を集中し活用することはできる。さらに、山岳研究資料に関する日本の窓口の一つとして世界とネットワークを組むことも必要だ。国立民族学博物館は民族学の日本における研究情報センターとも言えるだろう。国立大学に対して市立大学があるように、大町市の博物館が特定分野の日本における研究情報センターとなって国立の施設と肩を並べることに、なんら不思議はない。

こうした計画は実は最近の博物館の基本構想の中に時々出てくるのであるが、なかなか実現しない。コンピュータや通信システムなど技術的な面での進歩はきわめて大きいのが、基礎になる、個々の資料の収集や確認はきわめて古典的な、時間と手間のかかる作業だからである。逆な見方をすれば、大きな方向を見定めて、手間の掛かる作業をすみやかに始めていけば、近い将来世界的な山岳研究情報センターが実現するのも夢ではないと思うことだろう。(丹青総合研究所・草刈清人)

山岳博物館を考える

— 展示室を中心として —

平林 国男

大町山岳博物館と展示室

昭和二六年に創設された大町山岳博物館は、今年で三十七年目を迎えることになる。この間、大町市民のご理解とご支援のもとに山岳博物館のあるべき姿をまぎりながら活動を展開してきた。時代と共に博物館を取巻く社会情勢は大きく変わり、博物館自身も時代の流れに応じながら、緩やかな変容をとげ、より良い発展をめざして歩み続けてきた。

現在の建物は創定期から数える三代目の建物にあたり、展示室は建物が新しくなるたびに大きな改造が加えられた。

ところで、博物館の展示室は博物館と利用者をつなげる主要な施設であり、「博物館の顔」として重要な機能を持つことは、広く知られている。そして、絶えず集積される資料や、博物館自身が蓄積する学術的な知識や創造活動のすべてが表現される場であるといわれる。

大町山岳博物館の展示室は、三回にわたる大改造の間にも、収集資料の増加や時代の流れに対応した部分的な改装によって絶えず変容し、展示室の様子は改造後数年を経過すると大きく変わってしまう場合が普通であった。展示技術などの表現方法も、科学技術や新素材の開発に伴って変化している。しかし、ここでは技術や材料の問題を離れ、展示の基本となる実物資料を中心に、展示室の歩みを回顧してみたい。

初代の博物館

昭和二五年にまとめられた大町山岳博物館の建設構想には、「山岳文化に関する登山技術・動物・植物・鉱物・地形・気象・山岳・人体生理・考古・民族・歴史・人文・地理等あらゆる資料研究物を蒐集し、教育上観光上の大拠点たらしめる」とうたわれ、具体的資料として表1のリストがあげられている。

さまざまな学問分野に渡る多様な資料が想定され、内容的には未整理な部分もみられるが、実物資料や学術的な研究物と刊行物を含み、山岳文化の創造という理念のもとに構成されていた。

資料収集はこの指針で進められたが、予算や人的組織の制約のため、昭和二六年のオープン時までに収集された資料は、動物・植物・地学などの自然関係の標本が主体となった。登山関係はキャンプ用具などを含めて表2のように六五点だけであった。このため博物館のイメージは、動植物など自然史資料を主体とした郷土博物館の色彩が濃かった。

二代目の博物館

継続された資料収集活動によって資料数が増え、二代目の建物がオープンする昭和三二年には、展示室は郷土室・生物室・地学室のほか山岳室がつけられた。登山技術・スキー・登山史・山岳気象などの資料も積極的に取入れられたが、実物資料を持たなかったこれらの分野は、写真やパネルによる表現にとどま

大町山岳博物館にて蒐集する各種資料

- 登山技術
 - 遭難防止 遭難史 遭難地点分布図 遭難遺品
 - 登山用具の変遷 近代用具及び器具 雪上用器具(登山用に限らず) 登山食料
 - 用具 防寒具 著名山岳家の且つての器具用具 物故山岳家 案内人の遺品
 - 登山史的資料(ヘットナーストーンの写真の如きもの) 著名登山家の写真
 - 登山詳略図 著名山岳写真 スキー発達の歴史資料ソリ各種資料
- 動物
 - 哺乳類 鳥類 爬虫類 両棲類 魚類標本 仁科三湖プラグトン 軟体 甲殻
 - 昆虫類標本 又之が水平垂直分布図更に他地方との比較図表 附属動物園
 - 動物写真 各種植物標本及び水平垂直分布図表 附属植物園 植物写真
- 地質地形
 - 北アルプス構造及び地質図 火山湖沼関係資料 岩石 鉱物 各山岳標型
 - 北アルプスに見える地質学上の代表的諸現象の写真
- 気象
 - 各種山岳気象資料 山岳平地気象比較図表
- 民族歴史
 - 山伏山籠 狐節 推夫 炭焼等の器具用具
 - 山案内人(特に創定期力と称せし時)の器具用具 其他山村生活用具等
 - 山村住居の写真 模型(特に信州側飛騨側中側の各代表的のもの)
 - 山に関する信仰 諸行事に関する資料 山小屋の写真 昔に模型北アルプス山小屋
 - 石室全部の写真 山生活の食物(献立表等) 及衣料 山村部落の成り立ち
 - 山岳人体生理
- 山岳美術
 - 山岳の気象の人体に及ぼす影響の各種の研究物
- 山岳美術
 - 絵画農民芸術としての白樺細工 彫刻品
- 山岳関係図書
 - 近代刊行物 古文獻 古地図
- 以上蒐集後は此等の資料を基礎として更に中央アルプス・南アルプス更に日本全土 遠くは外国の各種資料を蒐集する

表1

り、博物館の展示としては魅力に欠けるものとなった。

その後、展示室は毎年部分的に改変され、五年後には、当初の面影を残した展示はほとんど消えてしまった。

部分的改変は、大町市が文化の日を中心に、全市をあげて催す文化祭行事と関連しながら、一年間の博物館活動の成果を発表する機会でもあった。こうして、三代目の建物が新築される直前には、海外登山室や鳥獣類のジオラマ室など室名の一部が変えられていた。

三代目の博物館

三代目の建物がオープンする昭和五七年には、すべての分野にわたって新資料が増加した。とくに、登山史資料で著しく、日本山岳会の寄託資料を含めると一八〇〇点を越える資料数となった。これら資料をベースとして現在の展示が構成され、山岳室と山麓室の基本構成に加えて絵画・彫刻などの美術品が組み込まれた。

スイスの山岳博物館

創設期における大町山岳博物館の展示構想

類別	昭和26年	昭和32年	昭和57年
哺乳類	38点	52点	187点
鳥類	203	401	539
登山史	65	96	1029
民俗	0	53	929

表2 資料(実物資料)数の推移

(紙面の都合で4分野の資料数に限った)



写真2 初代博物館の1階展示室（終期）



写真1 初代博物館の2階展示室（初期）



写真4 2代目博物館の山岳室（終期）

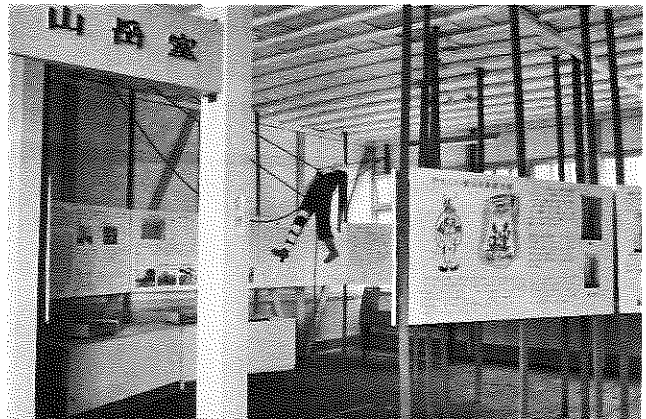


写真3 2代目博物館の山岳室（初期）

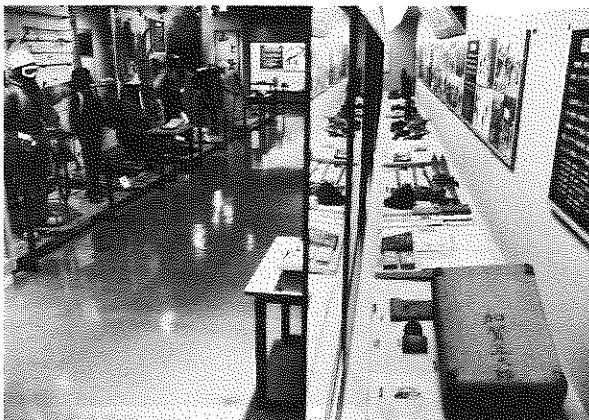


写真5 現在の博物館の山と登山コーナー

のモデルとした博物館は、スイスのベルン山岳博物館であった。この博物館は近代登山の発祥地であるヨーロッパを背景として、昭和八年（一九三三）に設立され、スイス山岳会が運営している博物館である。ところが、困ったことに当時の創設関係者の中には、この博物館を知っている者は一人もいなかった。我が国の博物館学の泰斗、故棚橋源太郎先生や、この博物館を知る数名の先生の知識とご指導をたよりに構想が立てられた。ほとんど具体的な情報を持たないまま、大町山岳博物館が創設され、今日まで独自の歩み続けてきたことになる。

たまたま、昨年九月にこの博物館を訪ねる機会に恵まれ、今まで漠然と想像するに過ぎなかった博物館を見学することができた。博物館は地理学と民俗学に造詣の深い先生

を中心として創設されたといわれ、山岳模型や地形図の変遷、あるいは測量や製図機械などのコレクションに創設者の個性が色濃く残されていた。また、登山用具の変遷から民族衣装や山岳絵画と、スイスアルプスを対象とした多様な展示内容は、対象山岳に違いがあるとしても驚くほど大町山岳博物館の展示と類似したものであった。大きく異なるのは生物の実物資料がみられない点で、関係資料では動植物の垂直分布帯を解説した一枚のパネルだけであった。

動植物のコレクションも持っているが、すべてを近くにあるベルン自然史博物館に依頼し、希望者には自然史博物館や動植物園を紹介するという。

ともあれ、漠然としたイメージのもとで、モデル館を想像しながら独自の歩み続けてきた大町山岳博物館の展示であったが、結果的にはモデルと似たものになっていた。人間の思考の類似性と限界をみせつけられる想いであった。

きわめて偶然なことであったが、丹青総合研究所の草刈清人プロデューサーが、同じ年にこの博物館とツェルマットの山岳博物館を見学していた。草刈氏は三代目の大町山岳博物館を新築する際、展示室の構成から展開など展示プランの立案に関係され、山岳博物館の展示のあり方について、連日遅くまで私どもと真剣な議論を交したプロデューサーである。これら博物館の紹介は別項で草刈氏にお願いすることにした。

（大町山岳博物館長）

ツエルマツト山岳博物館

ALPINE MUSEUM OF ZERMATT

草刈清人

マッターホルンの登山基地、谷間の小さな町ツエルマツト(スイス)にこの博物館はある。ウインパーなど初期のアルピニストが宿泊したことで有名なホテルモンテローザの経営者ザイラーのコレクションをもとに1944年にツエルマツト山岳センターとして開館した。その後山の自然などの資料を充実し1958年(昭和33年)夏に新装オープンしたのが現在の博物館で、この年は二代目大町山岳博物館が開館した翌年に当る。駅前から伸びるメインストリートをちよつと横にそれた、あまり目立たない所にある。

世界的な山岳リゾート地の博物館には規模は意外に小さく、やや大きな山小屋といった感じの二階建。入館料大人3フラン(3



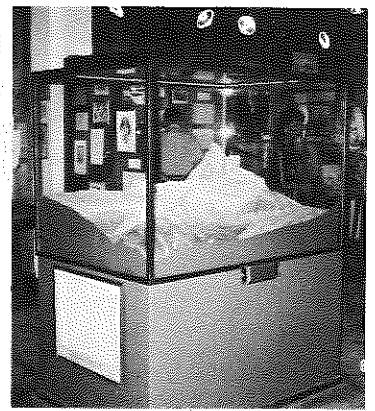
博物館の入り口
アイベックスの仲間の刺製が展示してある



ウインパー室
右のケースに切れたザイルが展示してある

右のケースに切れたザイルが展示してある。この切れたザイルに関する展示もある。山の自然ではツエルマツト地域の蝶の標本、高山植物の絵、動物の刺製、岩石鉱物の標本、先史時代の石斧や人骨などが並べてある。また、部屋の中にはツエルマツト地方(2500

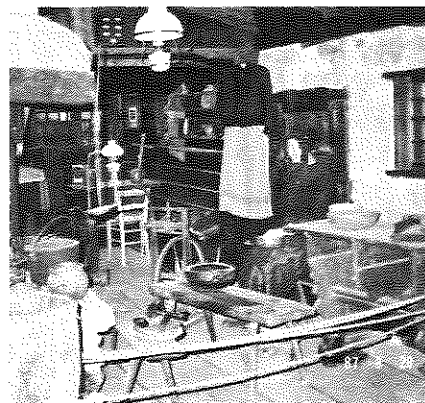
00円弱)、16歳以下1フラン、10名以上の団体は大人1名2フラン。
一階の展示はツエルマツト地方の登山の歴史と自然の紹介。展示の目玉は1965年に新設された「ウインパー室」、別名「1865年7月14日室」である。もちろん、この日付はマッターホルン初登頂の日。登頂メンバーの写真、油絵、道具、文書が展示してある。この登頂は下山時にザイルが切れ、一行7人の内4人が死亡するという惨事になる。この切れたザイルに関する展示もある。山の自然ではツエルマツト地域の蝶の標本、高山植物の絵、動物の刺製、岩石鉱物の標本、先史時代の石斧や人骨などが並べてある。また、部屋の中にはツエルマツト地方(2500



マッターホルンの5000分の1模型

0分の1)と、マッターホルン(5000分の1)の2つの地形模型が置かれている。5000分の1の山岳模型ともなると、なかなかの迫力で、資料としても価値がある。日本と世界の代表的な山岳の模型は大町でもぜひそろえて欲しい。二階へ上がる階段の壁面には遭難や山のガイドに関する写真、絵画が展示してある。

さて、二階の半分は歴史民俗の展示。17世紀初頭に造られたシャレー(スイスの伝統的民家)の一部が移築復元されており、内部にはさまざまな生活用具や人形がセットされている。このシャレーは、ウインパーとともにマッターホルン初登頂を果たした地元ガイド、タウグワルダール父子が住んでいたもので、登山史の上でも興味ぶかいものだ。他には、チーズ造りの山小屋の復元や、地元の歴史文書の複製、昔の写真などが展示してある。山小屋の復元展示は大町でもぜひ実現して欲しい。二階の残りの部分はピッケル、アイゼン、登山靴など道具の変遷や遭難者の遺品に重点を置いた登山史の展示になっている。



民俗の展示 シャレーの暮らしの復元展示

博物館だより

削除・訂正のお詫びとお願ひ
先月号、2ページ2段め5行めの「1カワウソ、ヒグマ」のヒグマを削除。
4ページ、バックナンバーのお知らせ(3)のうち第14巻第12号の内容は
北ア山麓の正月三ヶ日の行事 青木 治
食物を貯える習性 宮尾 嶽雄
と訂正お願ひします。

山と博物館 第33巻 第3号
発行所 長野県大町市 TEL220-2111
印刷所 長野県大町市 大町山岳博物館
大糸タイムス印刷部
定価 年額 一、二〇〇円(送料共(切手不可))
郵便振替口座番号(長野四一三九九二)